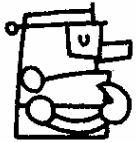


## 空気の成分は、どんなものなの



空気の成分は、およそ、5分の4がちっ素、5分の1が酸素と覚えておくといいのさ。

空気は、いろいろな種類の気体が混じってできています。そのおもな成分は、体積の割合で、ちっ素が78%、酸素が21%、アルゴンが1%、二酸化炭素が約0.03%といったぐあいです。ごく少ない成分まで入れると、水(水蒸気)、ネオン、一酸化炭素など、いろいろあります。

今あるような空気の成分になったのは、地球上に植物がたくさん現れ、光合成(葉の中で、葉緑素が日光の助けをかりて、水と二酸化炭素から、デンプンや酸素をつくり出すはたらき)を行うようになったからだといわれています。それより前の空気は、まだ、はっきりわかっていませんが、ちっ素や二酸化炭素が多く、酸素はほとんどなかったようです。空気中に酸素がふえてから、今いるような酸素を呼吸する動物が、生きられるようになったのです。

### 空気中にちっ素が多いから、安心してらせる

空気中でいちばん多い成分のちっ素は、ほかのものと結びつきにくい気体です。生き物にとって大切な酸素は、とても活発な気体で、すぐ、ほかのものと結びついて、金属をさびさせたり、リンゴの切り口をかつ色に変化させたり、食品の性質を変化させたりします。

もし、空気が酸素ばかりなら、すぐ、物が燃え出したり、ばく発したり、金属がさびてぼろぼろになったりして大変なことになるでしょう。ちっ素が多いから、酸素の活発さがおさえられて、安心してらせるのです。

ちっ素は、ほかのものと結びつきにくいから、役に立っているのね。

